

研究

魅せられて綴る藩文学（四）

藩学「四教堂」と先哲

勝間田 三千夫

（会員 佐伯市中村北町二一九）

（三） 松下筑陰

（一七六四—一八一〇）歿年四十七歳

一、松下氏の出自

松下筑陰を語るとき、その功績を知るには、筑陰の末裔にあたる松下哲氏が著した『佐伯文教の最盛期を省みて』（松下筑陰傳）が一見に値する。

筆者は著述にあたって、その著書を出来るだけ重複をさける為、松下家の系譜に基づき見ることにした。

子々孫々にあたる今日の松下家を城下西に訪ねて見ると、静かなたずまいの奥座敷の床の間には、時の藩主高泰侯直筆の「梅祥書屋」を命名した書一幅が掛けられ

ている。これは、筑陰文学の淵源を表わすもので、當時を安らかに偲ばせてくれる。

さて、松下家の系図を見ると、遡れば宇多天皇に発し、敦實親王が宿禰の祖となり、中でも佐々木氏が松下氏（姓）の祖をなしている。歴代六代目にあたる定綱のとき、その子四男泰綱が松下氏の祖となり、泰綱を松下初代とすると、五代目にあたる高長のとき、松下姓がはつきりとしてくる。その所以を系譜にすると次のようである。

五代 高長

松下出雲守佐々木出雲守山門衆徒於遠州笠原之庄平河還俗赴参河国

回国碧海郡住<sup>マ</sup>松下郷自是以松下為氏

六代 長信

松下参河守源左<sup>エ</sup>門尉参州碧海郡住<sup>ス</sup>松下郷

七代 国長

松下出雲守有馬則頼公為客兼城代役為執政  
職内外百務無所不聞

松下近江守賜有馬氏初名源五郎

播摩国ニテ誕生逐臣<sub>下</sub>有馬中務大輔刑部郷法

印源則頼公

天正十壬午年羽柴筑前守太閤秀吉公於城州

山崎明智日向守光秀合戰之時逐敵挑戰得勝

利

天正十八年則頼公撰州有馬郡三田領先勞賞

武功賜家祿二千石

文祿元壬辰年因太閤秀吉公之命豊氏公遠州

城東郡横須賀に移

文祿二癸巳年主君從源豊氏公海渡朝鮮國入

南原城先登大振勇力戰顯武威再与大明之軍

艦<sub>下</sub>戰水營瀬入敵軍高名人之所知帰陳之後

恩賜有馬氏感書及扶祿二千石

慶長三戊戌年豊氏公丹波国天田郡福知山<sub>二</sub>

移

同五庚子年九月関ヶ原合戰之時出陣

同十九甲寅年冬大坂陳出陣

元和六庚申年因命家康公豊氏公<sub>二</sub>賜筑後國

御井郡久留米城國綱抽所々軍忠賞其勤勞感  
書及御紋扶祿賜五千石為執權職兼城代役後

為陰居扶持五百石被下置

享年九十三歲久留米<sub>ニテ</sub>卒

九代 直長

松下七郎左<sub>工</sub>門武藏守文祿年中渡海朝鮮國

慶長五年九月関ヶ原陣同十九年申寅年冬大

坂陣出陣賜祿四百石

兄定綱於撰州山寄戰死<sub>テ</sub>故成家嫡

十代 秀國

松下七郎左<sub>工</sub>門

十一代 秀綱

松下兵右<sub>工</sub>門物頭用人

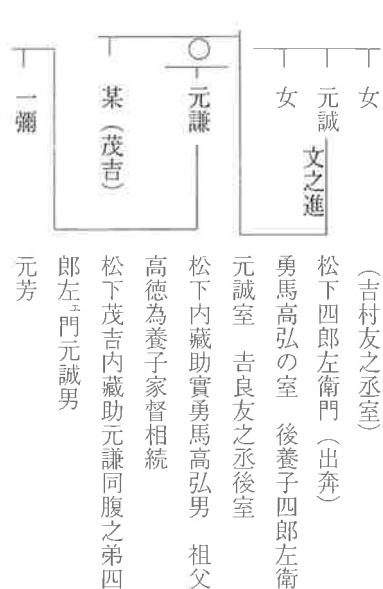
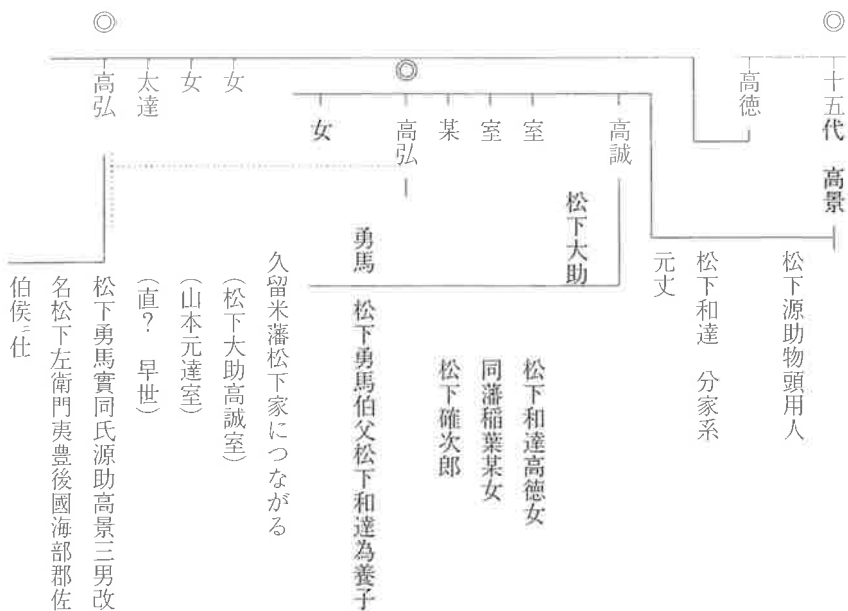
十二代 嘉當

松下八郎左<sub>工</sub>門尉用人鉄砲組物頭

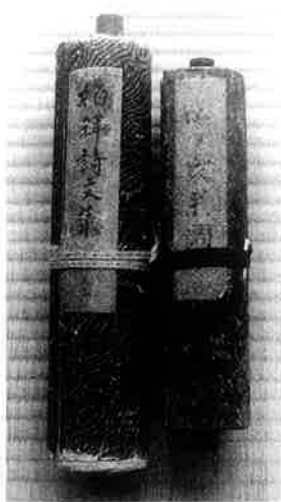
十三代 嘉成

十四代 高成

松下正藏



十五代高景の三男高弘が伯父にあたる高徳(松下和達(分家)の養子となつて、改名して松下左衛門夷となり、



右：松下家譜  
左：梅祥詩文集

伯父の四女と結婚して一子元謙に恵まれた。が、後に松下左衛門は故あって、家を出奔して一人旅に出た。この時の事の仔細、また年令は幾歳であったか等については後述する事とするが、結局、最終的には佐伯藩に解褐し、松下家の祖をなした。毛利家菩提所養賢寺の裏山にある松下家の墓地には、筑陰の戒名「世民篤修居士」と刻され、安らかに永眠している。墓碑には碑文は刻銘されていないが、碑文として末代まで伝えられる墓誌銘は別があり、嘉永時代に後学の氏によつて認められている。

以上、松下氏の出自から今日佐伯に在る松下家に至る系絡を概観したので、次に、郷閩の縁り久留米藩時代について見ることにする。

## 二、久留米藩の藩学

久留米藩の八代藩主有馬上総介頼貴は、筑後国の内に於いて二十一万石を領していた。

藩校は、初め講談所として天明五年（二七八五）城外に創立され、町人の聴講をも許可していた。次いで天明七年（二七八七）に修道館が創立され、こゝに藩士子弟の

みが学ぶ学問所となつたが、寛政七年（二七九五）に焼失したため、翌八年に再建して藩校明善堂と名を改めた。後文政八年十月には、城内に武芸稽古所を設立した。そして、万延元年（一八六〇）に学制改革を行ない、両者を合併して文武を兼ね合せた藩校となり、校名を学館と改称して、子弟を教導した。明治五年に廃校。

以上が藩校の沿革であるが、最も盛んな藩学時代は寛政から文化文政天保であり、久留米藩では明善堂がこの時代に該当する。その教科内容をみると次のようである。

初等 大学・中庸・論語・孟子の講究・和流の軍法・

和書の講義

中等 詩経・書経・春秋・文選の講究・詩文の習熟

上等 易経・礼記・近思録・周礼・儀礼・兵法・四書

五経の奥旨研究

初等から中等、中等から上等、上等から更に課外に進むには、春秋二回に行なう試業（試験）に合格しなければならなかつた。

なお、主な教官は、左右田尉九郎・樺島石梁で、藩学は朱子学を中心とした教育を展開させた。

また、久留米藩は江戸邸に学問所を設けて、侍講する儒官を置いていた。宝暦の初めまでは、古学派伊藤仁齋の流れを汲む伊藤竹里があたっていた。その後の儒官は明らかでないが、天明四年ごろであろうか樺島石梁が江戸邸に世子の侍講を勤め、また藩臣の子弟に教授した。

人物、樺島石梁についてみると、石梁は宝暦三年久留米藩士の子として生れ、年甫十一歳のときから藩老職某の臣として藩主三代に仕え、経を府学に講ずる儒者宮原南陸の門に遊んで書を師事し、後江戸に出て折衷学派中西淡淵の流れを汲む、細井平洲に師事した。そして前述のとおり江戸邸の侍講となった人物である。その後寛政八年米府藩校明善堂が創立されるとき、その造営の事を掌り、越えて久留米藩校の儒官となって、明善堂に藩士の子弟に教育を授けた。後、文政十年十一月三十日、天命七十四歳の生涯を閉じた。

### 三、米府・松下勇馬の遊学

系譜に、松下氏は代々久留米藩主有馬侯の重臣として仕え、用人格の家柄であった。勇馬高弘の父は松下源助高景で、その第三男として明和元年（一七六四）八月二十

四日、筑後国御井郡久留米に生れた。後、幾歳の時か、分家にあたる伯父松下和達高徳の婿養子になって後継した。伯父和達高徳は藩の官醫として仕えていたため、勇馬高弘はその家業を継がなければならなかった。幼にして学を好む勇馬高弘であったが、藩には子弟が学ぶ藩校はなく、よって、藩文学と呼ばれる先生に学問を師事し、また、私塾に学んで研鑽を積み、なお、学友で十歳上の樺島世儀（後石梁）の学問の影響が大きかったことを忘れてはならない。

一般的に藩学を終える十八・九歳頃、勇馬は天明二年（一七八二）学友の樺島世儀と津徳郷・梯季礼の徒と肥後熊本の藩を廻遊し、名所旧蹟を訪ね、讀えて詩を賦し、或いは、名士を訪ねて詩の応酬するなどして学問を深めた。肥後より豊後日田へ入り、名僧法蘭上人を訪ねて、遊学の詩五首を贈った。実はこの法蘭上人は、筑後は御井町永福寺の出身で日田廣圓寺の住職で詩の名家として著名な人物といわれている。

かくして、肥後豊後の遊学を終え日田街道を帰路にした。

社会は学校である。旅は活学問であると、頼山陽が

いつてるように、勇馬には初めての遊学に大きな収穫を得たに違いない。また、学問の楽しさに魅せられた勇馬は翌三年には筑前の亀井南冥門に俊才で知られる山士浦らと交わり、詩文をた、かわせ着々と学問を極めていった。

この年、勇馬は『竊窺篇』を著している。勇馬は松世民の名で、十一首の詩篇を載せ、他に釈宝月、津懋、樺公礼など、十二名の詩を載せている。

翌天明四年、勇馬は二十一歳のとき、学友樺島世儀・梯季礼と共に多年の宿願であった東都へ遊学した。が、この時樺島世儀は細井平洲に入門する時であったと思われるが、三人は初めて江戸地を踏み諸名家を訪ねた。

また、勇馬は、この時、大内熊耳に出入りし、佐伯藩主高標侯の大叔父にあたる扶搖公子に会したといっているが、この時大内熊耳は他界して八年になる。(扶搖公子は、同じ萩生徂徠の流れを汲む宇佐美潛水にも師事したが、一貫して大内熊耳に師事した。)大内熊耳は佐伯藩江戸藩邸において佐伯藩主一族の儒者であった。その証になるものに後述するが、大内熊耳文集がある。また、扶搖公子(毛利壺邸)については研究の途中である

が、ひとまず佐伯史談(第百五・百五六号、昭和六十二年十二月発行拙著)を参考されたい。

さて、勇馬は、扶搖公子とは初めての対面であったと思われるが、嘸かし公子の知遇を受け、交わりを深めたことであろう。伝記に、「重陽日田叔明崎山老師馬彦章陪扶搖公登泉岳寺前山」とある。これは、勇馬が重陽(九月九日)交友の三人と扶搖公子とで、泉岳寺の前山に登った時の題と思われる。また、「重陽登泉岳寺前山謹奉呈長孺公子」の寄題では、勇馬が長孺公子と一緒に前山に登った時の事を表わしている。この長孺公子は、扶搖公子の一子利濟(滝川長門守利雍)のことで、時に二十五歳位で、扶搖公子は、五十五歳であった。佐伯藩の下屋敷は芝高輪三田白金(今里村)に在り、泉岳寺また毛利の菩提所海上禅林東禅寺も近くに在ることから、扶搖公子親子はこの下屋敷に居住していたと推察される。また、「寄題佐伯西大夫緑暁館英渠館宿家」が文中にある事から、察すれば、確かに佐伯藩臣とも交わりがあった事が伺え、従って、勇馬は佐伯藩下屋敷に出入していたことは確かである。この西大夫とは梶西金左衛門のことで安齋と号し、この時、四十歳位であった。

勇馬は江戸に止つて三有余年、久留米藩江戸藩邸の学問所に居して、都下の諸名家と交流を深められ、殊に、前述の如く、佐伯藩文学の学祖扶搖公子との交遊によつて得たのが、扶搖公子の師である大内熊耳の文集卷之六の三所収「送秋婦徳帰佐伯序」の一文である。この一文を書写して持ち帰つたと思われるものが、今も松下家の二枚屏風に香り高く當時を偲ばせている。

今、それを概観すると、大内熊耳曰く「佐伯ヨリ來テ余ニ從テ遊ブ、今ノ佐伯侯少キガ略」また、曰く「扶搖公子国ヲ去テ外ニ在ル且ツ十年略」と。

扶搖公子(貴寵公子)は、宝曆五年(一七五五)二十五歳の時に、大内熊耳に入門し、明和二年(一七六五)の秋三十五歳のとき学成つて門下を終えている。また、扶搖公子がこの学問修業中のとき、佐伯藩侯(高標)が幾歳であつたか(高標侯はこの明和二年の時十二歳である。)大内熊耳に入門している。高標は宝曆四年(一七五四)江戸に生まれ、同十年六歳の時八代藩主となつてゐることから察すれば、この時頃から熊耳に師事する事になつたのではないか、高標は幼少なため扶搖公子が学問(経)を授けたとある。つまり、高標侯は大叔父に学問を教授され

たことになる。明和二年(一七六五)扶搖公子が年期を満たして將に帰さんとするとき、高標侯に問われて、扶搖公子はその問いに答えて惜別の念にたえられなかつた、と。

扶搖公子は、前述のように、上京の時期はいつであつたかはさだかではないが、大内熊耳の門を叩いたのは宝曆五年二十五歳のときであり、年期を満たして帰る十年の歳月を觀れば、その間、宝曆七年(一七五七)三月二十八日、二十七歳で水戸老職山野辺兵庫頭義胤の養子となり、実名浪江を義方と改めている。(因に、安永六年(一七七七)七月二十三日、故あつて、山野辺家より離縁されたので、高標侯はひきとり家号を旧森姓にして上総国に住した。時に四十七歳)。(佐伯史談第一五五号参照)

又、大内熊耳曰く「佐伯ノ文学扶搖公子ヨリ始マル」と、佐伯藩の文学は扶搖公子を以て文質彬彬といつてゐる。しかし、扶搖公子は水戸藩老職山野辺家(一万石)の養子山野辺図書となつた。それを知る熊耳は佐伯藩の文学のこれから先を案じて、扶搖公子に贈言をなしている。

かくして、勇馬は扶搖公子との語らいの中で、佐伯藩の学情を知悉され、藩文学の行く末を憂えたと思われる。大内熊耳の文集「送秋婦徳婦佐伯序」との出会い、そして梶西金左衛門との出会いのあつた事が、後の勇馬の生き方に、偶然とはいえ大きく影響したことは確かである。

因に、扶搖公子は、天明六年七月十一日、五十七歳の生涯を閉じた。また、嫡男利濟は天明五年滝川家の養子となり、名を利雍と改めた。世に長孺公子で知られた人物である。

さて、勇馬は天明六年二月四日江戸遊学を終え、東都を発して郷里に向う途中、摂津大坂四天王寺に眠る先祖の廟社を訪ねて、久留米に着いたのはいつの日であったか。

勇馬の江戸三有余年の遊学は、諸名家を訪ねて詩文の議論を激しく交え、また薰陶を受けたことであろう。かくして、文学に於ては折衷学派に属する学問を確立され、家業が官医であるだけに、その後継の是否の心は別としても医の学問をも修めた。

帰藩して、天明七年（一七八七）五月六日、両替町の講

席（藩校明善堂の前身）が、狩塚門内の町奉行所あとに移つて修道館となり、勇馬は会談員の名のもとに、天明九年六月（一説に八年とも）に儒官に推挙された。

#### 四、勇馬、米府脱藩

天明九年（寛政元年）修道館に儒官として奉職していた勇馬であったが、翌寛政二年二月二十八歳のとき、久留米藩を脱藩した。

この脱藩について、松下家先人哲氏の著によると「勇馬は叔父の家を継ぎ、家業である醫を好まなかつたので出奔したと伝えられている。」と言っている。

松下氏は本家・分家を問わず、代々有馬侯に仕える藩臣であり、然も用人格で扶持米を給する重臣の家柄である。勇馬はこの高名を馳せた松下家を継ぐべき人物であった。

家業である醫を好まずとも、若くして儒官に抜擢せられた要職で身を立てることはできたはずであるが、しかも、妻子をも捨てて出国されるには何か深い要因があつたにちがいない。では、勇馬に脱藩を決意させるまでに至らしめたその真相はなんであつたのか。



「筑陰伝」にある樺石梁の書に、勇馬が出国せんとする真想があると思われる。

一に、天明七年五月、両替町の講席から会談員の名の基に儒官に登用された経緯に、若干にして早すぎるとする反対意見もあつたこと。

一に、藩校修道館の内において、学者(儒官)の間に学派・学説をめぐる争いが絶えなかつたこと。

勇馬が出国した寛政二年二月、この年の五月に幕府の老中松平定信は寛政異学の禁制を發している。これは朱子学以外の学問は禁ずというものであつたが、もつとも中央にあつて、異学者登用禁止の令により、官僚群を形成しようとする意図によるもので、諸藩の学問に直接的影響(強勢)はなかつたが、しかし、これに準じようとする藩も少なくはなかつたようである。

この時代の儒学は折衷学が主流をなして、考証学の起つた時期であつた。

米藩修道館のこの時の学風は、土佐高知藩の南村梅軒の伝える海南朱子学派の流れを汲む谷時中が出て、その門に学んだ山崎闇斎の学を旨としていた。また、当時の久留米藩では、熊本から招聘した左右田鹿門を修道館の

教授としていた。鹿門は元來徂徠学徒を隠して奉職していたと言われている。

よつて、米藩の儒官の学派は、程朱子学派・護園学派・折衷学派の三学派と言ふことになるが、藩学は程朱の学を重んじることが本旨とした。幕府も朱子学を旨としただけに米藩内の学者の間では学派をめぐる争いが絶えなかつたであらう。まして折衷学派を旨とす勇馬には、年令も若く大きな重圧となつたのではないか。

因に、幕府のこの異学禁制も、寛政七年(一七九五)に強く令したが、これに反対もあつたため諸藩に対する効果は少なかつた。

一に、家業である醫を後継することをきらつていること。

以上のことから勇馬の心中を察するに、学問をなお極めんとする青雲の志があつた。

しかし、それは決して盲目的決断でなく、尽言の末の結論をもつて父母に懇えたが、却つて怒りをかつた。だが勇馬の心中は変らなかつた。終りに出国するに去つたのである。

もし、勇馬の望みを父母が叶えてやれば、そこに遊学

の期限を満たして帰郷させる話し合いもできなかったのではなかつたか、樺石梁の書にそれが見えるのである。おそろく勇馬はかゝる心境をもつて懇えたのではなかつたか、それが父母に聴き入れられなかつた。勇馬は望みは果したがい父母や妻子を思えばと心中は葛藤していた。家族に詫びて詰る心をふるいた、せて出国の決意をした。おそろく耐え難きを耐え忍んでの出国であつたらう。歩足は重く、家を仰ぎ見ながら、再び故郷の土を踏むことのない出遊となつた。

因に、勇馬出国の後、名門松下家は嫡男元謙を養父高徳和達の養子になし家督相続された。また弟元誠(四郎左工門)も一子茂吉を残して、勇馬と時を同じく出国している。

振り返つて、勇馬はこゝに到る七年前、天明三年二十歳の時に『窃窕篇』なる詩集を著している。

この著は、師宝目和尚が二十年ぶりに日田から筑後(現在の御井町永福寺)に帰郷した折、和尚と囲んで友人・後輩らが「積翠亭」・「青松館」など、同志の邸宅で催した詩会での作品を集録されたものと言われ、当時意気さかな俊英十二人の作品集である。中に勇馬も「松

世民」の名で十一首の詩篇を載せている。題名は勇馬によるものであるが、「詩経」の「窃窕之章」陳風・月出篇の第一章、「山水・宮殿などの奥ゆかしいさま」から採名されたと思われる。

脱藩にあつて、この風月のグループの中でも、宝月上人・梯箕嶺・樺島石梁は承知していたと思う。

勇馬の脱藩の真意は何んであり、封建制度の中、世襲制が重んじられた社会では、家督を継ぐことは家業をつぐことであり、殊に藩の重職にある家柄だけに、この際、宿命的な決断として脱藩する以外に道はなかつた。また、家名断絶を避けるために嫡男元謙を祖父(和達)の養子になし、家督相続された。

#### 【参 考】

広瀬淡窓と師筑陰との出会い二百年記念

窃窕篇 松下筑陰編

鶴久明德著

留別

園君子友

一帆南去海滔々

赤馬関頭潮勢高

自是牧乗君不位

即今那賦広濤凌

松下英

松平英

留別

園君子発

一帆南去海滔々

赤馬関頭潮勢高

自是牧乗君不位

即今那賦広濤凌

松下 彝

拜具

〔注〕

留別の詩の相手、園君子とは、「笈窶篇」に出る園 含章であろうか。この墨跡は家老岸氏の馬乗格の家臣、十間屋敷新郭の園田家に存したもので、同家には細井平洲の揮毫した「万竹堂」の扁額が後年まであり、歴代の当主はこれを書院号としていた。園田氏を平洲に紹介したのは榊島石梁とい

# 浦代峠



米水津村は、小さな入り江を  
たくさんもつ米水津湾を抱えた  
美しい村である。浦々の集落は  
海に向かって開け、背後には  
山々が連なる。陸路で村に入る  
うとすれば、どこから行つても  
峠越しとなる。だが、どの道も  
つらい。そのなかで、佐伯市の  
木立地区から元越山の北を越え  
て入る浦代峠が唯一の自動道といえる。

江戸時代はこの道もひどかった。記録には「佐伯城下より浦代村まで三里三十町、牛馬の道なし」とある。このため海路がよく利用された。しかしこれも鶴御崎を回らねばならない。「鶴御崎と申難所有。日和悪敷、南風に候へば、上下之船渡暇なし」というありさま。

だが、浦代の港はよかった。「浦代の湊、長さ六町、はば三町、岸深く潮満干にかまひなく、何風にても不苦、船がかり吉」という。しかしこの立派な港と浦の村々も、海路は遠く陸路はけわしいとなれば、孤島と全く同じだった。

その難路も、時代とともによくなっていく。明治の初めには旧佐伯藩士の浦代浦戸長小林隆吉によって山桜が

植えられる。国木田独歩は明治二十六・七年、シカ狩りの帰途にここを通つたり、あるいはここから元越山に登るが、彼は峠の道のこと、あるいは茶屋のことなどを書き残す。

明治四十年には米水津・木立両村で土木組合がつくられ、四十三年に峠の大改修が完了、トンネルも通じて車馬が通うようになる。旧道の山桜と並んで新しい峠には吉野桜を植え、やがて浦代峠を大分県下の桜の名所とした。このときの土木組合長は南海部郡長の多羅間政輔という人。たいへん巨漢で、峠を歩くのに前引き、後押しがいったそうだ。

「村に新紀元を画した」といわれたこの道も、いまでは旧道となつている。これより標高にして約五十以下に、昭和四十四年に新トンネルが開通したからである。新道にも桜がある。旧道の桜も残り、春は花の峠路だ。

ところで峠の米水津側中腹から現在、鶴見町に抜けるトンネルが掘られている。佐伯市木立地区や米水津村は鶴見町と背中合わせで、この間に松浦越はじめいくつかの峠があるが、旧藩時代の方が道がよかつたといわれるほどで、いまはハンターが利用するていど。このため米水津―鶴見道路に寄せる期待は大きく、完成すれば浦代峠と並んで大きな役割を果たすだろう。

〔峠シリーズ②〕・大分合同新聞・昭和五十三年一月三十日版